

令和7年度 学校経営計画に対する自己評価計画書

石川県立門前高等学校

重点目標1 全教育活動を通して個々の生徒が達成感や自己有用感を感じ自己肯定感が高まるよう、授業改善等で教員の生徒指導力、教科指導力、生徒理解力を高める。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考	
<ul style="list-style-type: none"> 授業改善を通して教員の生徒指導力、教科指導力、生徒理解力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 年に3回互見授業期間を設定し、互いに研鑽し授業力を高める。 初任者研修の研究授業に他教科の教員も参加することにより、ともに授業力を磨く。 	教務課	<ul style="list-style-type: none"> 各学年、クラスともに多様な生徒を抱え、個別最適な学びを進めることが重要となっている。 	【成果指標】（教員） 教員一人一人が授業改善をした結果、生徒指導力、教科指導力、生徒理解力の高まりを感じている。	「生徒が達成感や自己有用感が高まるようにICTを活用するなどの授業改善をした結果、生徒指導力、教科指導力、生徒理解力が高まった」と評価した教員の割合(①+②)が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 高まった 14.3% ② 概ね高まった 71.4% ③ 余り高まっていない 14.3% ④ 全く高まっていない 0.0%	A 86%	【分析】 生成AIをはじめ、新しいツールに関する研修を経て、ICTを効果的に活用した授業の研究がすすみ、生徒の達成感や自己有用感を高める授業ができていると感じる教員が増えている。 【今後の対応】 日々進化するICT技術に関して研修を進め、さらに生徒の達成感や自己有用感を高める授業改善につなげていく。	教員対象調査(7, 12月)
				【成果指標】（生徒） 生徒一人一人が、授業のなかで自己有用感、自己肯定感を感じている。	「授業を通じて、他者の良いところや自分の良いところを見つけることができ、自分に自信が持てるようになった。」と評価した生徒の割合が(①+②)が A 75%以上 B 65%以上 C 50%以上	① 自信が持てるようになった 51.6% ② 概ね自信が持てるようになった 43.2% ③ 余り自信が持てなかった 5.2% ④ 全く自信が持てなかった 0.0%			
<ul style="list-style-type: none"> いじめを早期発見・早期対応する。 	<ul style="list-style-type: none"> 全職員が、「いじめを見逃さない」という意識を常に持ち、生徒の言動に注意深く目を向ける。(気になる言動に対し、必ず声を掛け、職員間で共有する) いじめ調査の実施 いじめに関する校内研修 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 思慮深さに欠けるかかわり方をしてしまう生徒に対し、相手目線に立った思いやりのある言動が取れるよう、継続的に指導していく必要がある。 	【成果指標】（教員） 日々の生徒観察を注意深く行い、気になる言動が見られた場合は必ず声を掛け、職員間で共有している。	「日々の生徒観察を注意深く行い、気になる言動が見られた場合は必ず声を掛け、職員間で共有できている。」と評価した教員の割合(①+②)が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	① できている 31.3% ② 概ねできている 62.5% ③ 余りできていない 6.3% ④ できていない 0.0%	A 94%	【分析】 「できている」が12.5pt増加した。生徒との関わりを円滑に行えるようになったことに起因していると考えられる。 【今後の対応】 教師と生徒の日常的な関係性が、気づきや声掛けにつながることは確かであるので、教師と生徒間にも意図的な関わり合いの機会を設けていくこと、気付きの共有の良い方法とその情報の活用について考えていくことを地道にコツコツ続けて指導力の向上を図りたい。良いものは良い、ダメなものはダメと伝え合える関係性を築いていけるよう、「余り」と感じている職員も巻き込んで実践力を付けていきたい。	教員対象調査(7, 12月)
				【成果指標】（生徒） 学校生活の中で、「頑張った」「分かった」「できた」と感じる生徒の割合が(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	「学校生活の中で、「頑張った」「分かった」「できた」「誰かの(みんなの・地域の)役に立てた」と感じる生徒の割合が(①+②)が A 100% B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 行っている 43.8% ② 概ね行っている 56.3% ③ 余り行っていない 0.0% ④ 全く行っていない 0.0%			
<ul style="list-style-type: none"> 生徒の自己有用感を高め、主体的に社会性を育むことのできる生徒指導を組織的に実践する 	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動・特別活動において、学校・学年・学級の現状に応じた計画的・意図的な取組を実践する。 構成的グループエンカウンター等の年間を通じた実践。 規範意識の醸成を目指した継続的な指導。 教員の生徒理解力の向上(具体的には次の個別目標) 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 個・集団の良さを引き出す、生み出す視点を常に持ち、学校教育活動の実践に取り組む、生徒自らが自分や相手の良さに気づき、互いを尊重し伸ばしあおうとする態度を育んでいく必要がある。 	【成果指標】（教員） 個・集団双方に目を向け、現状を分析し、それに沿った目標と具体的取組を考え実践する中で、生徒の変容に気づき、生徒自らが自己有用感を感じられるような声掛けを意図的にしている。	「個・集団双方に目を向け、現状を分析し、それに沿った目標と具体的取組を考え実践する中で、生徒の変容に気づき、生徒自らが自己有用感を感じられるような声掛けを意図的にしている。」と評価した教員の割合が(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 行っている 43.8% ② 概ね行っている 56.3% ③ 余り行っていない 0.0% ④ 全く行っていない 0.0%	A 100%	【分析】 「行っている」が21.3pt増加した。「余り」が居なくなった。「いじめの早期発見」と同様、生徒に自分への気づきを促す声掛けも、前期と比較して教師自身が意図的にやるようになってきているようである。 【今後の対応】 生徒のリソースを生かし、自己有用感の醸成につながる指導ができるよう、今後も研鑽に励み実践していきたい。SGEについては、来年度は内容をそれぞれの担当者が考えるような手法に変えて実践したい。	教員対象調査(7, 12月)
				【成果指標】（生徒） 学校生活の中で、「頑張った」「分かった」「できた」「誰かの(みんなの・地域の)役に立てた」と感じる生徒の割合が(①+②)が A 100% B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	「学校生活の中で、「頑張った」「分かった」「できた」「誰かの(みんなの・地域の)役に立てた」と感じる生徒の割合が(①+②)が A 100% B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① ととても感じた 61.1% ② 少し感じた 32.6% ③ 余り感じなかった 6.3% ④ 全く感じなかった 0.0%			
<ul style="list-style-type: none"> 教育相談的視点からの生徒理解力を高め、生徒のSOSに気づき、適切に対応できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「気づき票」の活用 個人面談の実施(担任・学年・相談担当・SC等) 校内研修会(毎月の職員会議におけるケース会) (若プロでのケースワーク) 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 被災した生徒の心理的ケアを含め、カウンセリングマインド(受容・傾聴・共感)を持った組織的・継続的な生徒対応の実践を心掛けている。 	【成果指標】（教員） カウンセリングマインド(受容・傾聴・共感)を持った組織的・継続的な生徒対応の実践を心掛けている。	「カウンセリングマインド(受容・傾聴・共感)を持った組織的・継続的な生徒対応の実践を心掛けている。」と評価した教員の割合(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 心掛けている 37.5% ② 概ね心掛けている 62.5% ③ 余り心掛けていない 0.0% ④ 全く心掛けていない 0.0%	A 100%	【分析】 前期と各層のポイントは同様。 【今後の対応】 生徒が声を上げやすい環境、また声を挙げた結果自分の生活が良くなった(伝えて良かった)と感じられる対応を心掛け、生徒が自分の困りや悩みをうまく表出させることができるよう、実践力を高めたい。	教員対象調査(7, 12月)
				【満足度指標】（生徒） 先生たちは、自分が悩んだり困ったりした時に、親身になって話を聞いてくれる。	「先生たちは、自分が悩んだり困ったりした時に、親身になって話を聞いてくれる。」と評価した生徒の割合が(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① している 66.3% ② 概ねしている 31.6% ③ 余りしていない 2.1% ④ 全くしていない 0.0%			

<ul style="list-style-type: none"> スマートフォン等を安全に便利に使用する力を育成する 生徒アンケートに基づく研修を通じた共通理解と指導（アンケート（7月実施））（研修（8月職員会議で実施）） 全教員による校内ルール徹底の指導 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 「自分にとって危険である」「自分にとって妨げになる」といった意識を持ち、自制する力を身に付ける必要がある。 	【成果指標】（教員） 生徒がスマートフォン等を自分で正しく使う力が身に付けられるよう指導した。	「危険が無いか、トラブルが起こらないか、自分の本来行うべきことの妨げになっていないかを生徒自身が考えて、スマートフォンやクロムブックを使用できるように指導している。」と評価した教員の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>している</td><td>37.5%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねしている</td><td>50.0%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りしていない</td><td>12.5%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くしていない</td><td>0.0%</td></tr> </table>	①	している	37.5%	②	概ねしている	50.0%	③	余りしていない	12.5%	④	全くしていない	0.0%	B	【分析】 「余り」が2人いる状況が変わらなかった。その背景についてはアンケート調査の結果等により分析し、対応策を考えていかねばならない。 【今後の対応】 中間評価後、職員間でできまりについて再度共通理解をする機会を設けた。しかし、SNS等の使用について生徒の現状を把握するアンケートの実施が遅くなり、それを踏まえた指導を実践するに至らなかった。昨今起きているSNSの使用をめぐるトラブルに鑑み、教師自身が指導の必要感を強く持ち、生徒のために実践していけるよう取り組んでいきたい。しかし、学校での指導には限界がある。家庭での指導の義務もしっかりと果たしてもらえよう、呼びかけていきたい。	88%	教員対象調査（7、12月）	
			①	している	37.5%																	
②	概ねしている	50.0%																				
③	余りしていない	12.5%																				
④	全くしていない	0.0%																				
【成果指標】（生徒） スマートフォン等を自分で正しく使う力が身に付いた。	「危険が無いか、トラブルが起こらないか、自分の本来行うべきことの妨げになっていないかを考えて、スマートフォンやクロムブックを使用している」と評価した生徒の割合（①+②）が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>している</td><td>76.3%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねしている</td><td>21.1%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りしていない</td><td>1.1%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くしていない</td><td>1.1%</td></tr> </table>	①	している	76.3%	②	概ねしている	21.1%	③	余りしていない	1.1%	④	全くしていない	1.1%	A	【分析】 「余りが3名減り、その分「概ね」が増えた。使用の仕方が改善したのか、生徒の中で「している」の基準が変わったからなのかは分からない。 【今後の対応】 どのような危険があるか、危険を回避するためにはどうすれば良いかを確かな知識のもとに正しく考え、判断行動していけるよう、アンケート結果も活用して指導にあたりたい。	97%	生徒対象調査（7、12月）				
①	している	76.3%																				
②	概ねしている	21.1%																				
③	余りしていない	1.1%																				
④	全くしていない	1.1%																				
<ul style="list-style-type: none"> あいさつの習慣化 	<ul style="list-style-type: none"> 登下校時の指導において、あいさつを励行する 教員によるあいさつの率先垂範 生徒自身があいさつの意義を実感できるような取組を考え実践する。 	生徒相談課	<ul style="list-style-type: none"> 生徒間のあいさつ、様々な場面でのあいさつ（感謝や謝意を伝えるなど）について、当たり前に行えるよう指導していく必要がある。 	【成果指標】（教員） 生徒があいさつの意義を感じ、場面に応じた自発的なあいさつを習慣化できるよう、自らが率先励行し指導した。	「生徒があいさつの意義を感じ、場面に応じた自発的なあいさつを習慣化できるよう、自らが率先励行し指導した。」と評価した教員の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>している</td><td>75.0%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねしている</td><td>25.0%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りしていない</td><td>0.0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くしていない</td><td>0.0%</td></tr> </table>	①	している	75.0%	②	概ねしている	25.0%	③	余りしていない	0.0%	④	全くしていない	0.0%	A	【分析】 「余り」が無くなり、「している」も18.7pt増加した。 【今後の対応】 場面に応じた挨拶の良きモデルとなるよう今後も率先励行を心掛けたい。	100%	教員対象調査（7、12月）
				①	している	75.0%																
②	概ねしている	25.0%																				
③	余りしていない	0.0%																				
④	全くしていない	0.0%																				
【成果指標】（生徒） 場面に応じた挨拶を自発的にできる。	「場面に応じたあいさつ（出会ったとき・何かしてもらったとき・迷惑をかけたときなど）を自分からできた」と評価した生徒の割合（①+②）が A 80%以上 B 70%以上 C 50%以上 D 50%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>81.1%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできた</td><td>17.9%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできなかった</td><td>1.1%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできなかった</td><td>0.0%</td></tr> </table>	①	できた	81.1%	②	概ねできた	17.9%	③	余りできなかった	1.1%	④	全くできなかった	0.0%	A	【分析】 前期と大きく変わらない傾向である。 【今後の対応】 もともと高い評価であったが、中でも生徒が意識的に取り組んでいくことで、互いに良い影響を与えあってより良くなるという姿が見られるようになってきている。良い姿はきちんと認め、門前高校の良さとして生徒自身が誇りを持って行えるよう働きかけたい。	99%	生徒対象調査（7、12月）				
①	できた	81.1%																				
②	概ねできた	17.9%																				
③	余りできなかった	1.1%																				
④	全くできなかった	0.0%																				
学校関係者評価委員会の評価	最近、普段町ですれ違った時なども、とても元気にあいさつができるようになった。																					
評価結果を踏まえた今後の改善策	もともと高い評価であったが、その中でも生徒が意識的に取り組んでいくことで、互いに良い影響を与えあってより良くなるという姿が見られるようになってきている。良い姿はきちんと認め、門前高校の良さとして生徒自身が誇りを持って行えるよう働きかけたい。																					

重点目標2 生徒・教員が「門前町・總持寺通り商店街の復興」をテーマとした3年間の系統的探究活動によって探究力を身につけるとともに、災害から学んだことを地域貢献活動を通じて活かす。

個別目標	具体的取組	担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考														
<ul style="list-style-type: none"> 地域復興に貢献する資質・態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 復興をテーマとした「総合的な探究の時間」の充実 復興に向けた地域との連携 	教務課 各学年	<ul style="list-style-type: none"> 探究活動を通して、関係機関と連携し、門前地域特有の歴史や文化を学び、この地域の強みを理解することで、地域の復興に貢献しようとする主体的態度を育成する。 フィールドワークを通して、現状やニーズを知り、門高生だからできるハード・ソフト両面からの復興支援を提案し、実践する力を身に付ける必要がある。 	【成果指標】（教員） 探究活動を通して、地域復興について具体的な考えを発信させることができた。	「探究活動を通して、地域復興について具体的な考えを発信させることができた」と評価した教員の割合（①+②）が A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満	B	【分析】 今年度1学期にフィールドワークに出ることが少なかったが、二学期以降は地元の方とのふれあいの機会も増え、改善した。 【今後の対応】 来年度はより地元との交流を増やし、復興につながっているとの実感が持てるようにしたい。	73%	教員対象調査（7、12月）													
				【成果指標】（生徒） 探究活動を通して、地域復興について具体的な考えを発信することができた。	「探究活動を通して、地域復興について具体的な考えを発信することができた」と評価した生徒の割合（①+②）が A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満					<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>70.5%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできた</td><td>26.3%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできなかった</td><td>2.1%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできなかった</td><td>1.1%</td></tr> </table>	①	できた	70.5%	②	概ねできた	26.3%	③	余りできなかった	2.1%	④	全くできなかった	1.1%
①	できた	70.5%																				
②	概ねできた	26.3%																				
③	余りできなかった	2.1%																				
④	全くできなかった	1.1%																				
<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動による地域・他者貢献意識の高揚 	<ul style="list-style-type: none"> 總持寺参道清掃 地域ボランティアへの参加 年賀状作成 各種地域行事への参加 	総務課 生徒会 各学年	<ul style="list-style-type: none"> 震災後は支援を頂く機会が多く、自分たちが主体的に復興に貢献する意識がまだ低い。 	【満足度指標】（生徒） 参道清掃や被災地域でのボランティア活動への参加等を通して、「地域貢献の心」「被災者への思いやり心」「協働する心」が育った。	「参道清掃や被災地域でのボランティア活動への参加等を通して、「地域貢献の心」「被災者への思いやり心」「協働する心」が育った」と答えた生徒の割合（①+②）が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>89.5%</td></tr> <tr><td>②</td><td>だいたいできた</td><td>10.5%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできていない</td><td>0.0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできていない</td><td>0.0%</td></tr> </table>	①	できた	89.5%	②	だいたいできた	10.5%	③	余りできていない	0.0%	④	全くできていない	0.0%	A	【分析】 災害ボランティアや公民館の移転作業など、生徒にとって有意義な経験となった。学年が進むにつれて「自分ができること」を主体的に見出し、地域貢献への意識が深まっている。 【今後の対応】 今後も地域との連携を軸に、ボランティア活動の機会を継続していく。生徒一人ひとりが地域社会の一員としての自覚を持ち、より広い視野と思いやり心を育てていけるよう支援を続ける。	100%	生徒対象調査（7、12月）
①	できた	89.5%																				
②	だいたいできた	10.5%																				
③	余りできていない	0.0%																				
④	全くできていない	0.0%																				
学校関係者評価委員会の評価	商店街を中心に活動をしてくれて、感謝している。今後は門前町全体へ視野を広げていくことも考えてみてはどうか。商店街以外にもいい場所や商品はまだまだあるということを生徒にも知ってもらいたい。																					
評価結果を踏まえた今後の改善策	地域との連携やボランティアの機会を継続し、多様な活動を通じて実感を積み重ね、より豊かな地域貢献の心を育てていく。																					

重点目標3 「GIGAスクール構想」を通して低学年次より個別最適な学びに取り組ませることで両コースの特性を高め、卒業後の生徒の多様な進路実現につなげる。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考
・低学年次から、一人1台端末やタブレット等の教育ICT環境を活用した学習に取り組む、「個別最適な学び」の充実による学力の向上を目指す	【両コース共通】 ・家庭学習を前提とした授業 ・習熟度別授業 ・朝学習 ・放課後補習 ・個別指導 【普通コース】 ・模試の振り返り 【キャリアコース】 ・各種資格取得	進路指導課 教務課 GIGA校内推進リーダー 各学年 各教科	・家庭学習習慣が定着できておらず、学習内容の定着が十分にできていない。 ・教員のICT(端末機)を用いた反転授業への取り組み率が低い。 ・主に大学進学を目指す生徒へ個に応じた学習指導力の向上が求められている。	【成果指標】（生徒） 普通コース：学習支援ソフトを取り入れるなど、個別最適な学びに取り組ませることで、模試の成績が伸びた。	普通コース：模試の年度始めと年度末の学力レベルの値を比較し、成績が上昇した生徒数の割合で評価する 【1年生】 3教科(国・数・英)のGTZ値 対象：4月スタディーサポートと1月進研模試 【2年生】 5教科(国・数・英・理・社)のGTZ値 対象：4月スタディーサポートと1月進研模試(国・数・英)、10月進研模試と1月進研模試(理・社) A 70%以上 B 60%以上 C 60%未満	C 50%	【分析】 1年生は18人中12人について成績が伸びたが、2年生は20人中7人とどまった。2年生は特に数学で伸び悩んだ。 【今後の対応】 1年生については、学習習慣が少しずつ身についてきているので継続する。また、2年生については進路実現を目指し、3年次に個別に対応する必要がある。	対外模試結果
				【成果指標】（生徒） キャリアコース：各種検定試験に合格できた。	キャリアコース：各種検定試験（各種商業科検定・福祉科資格等）の合格者数の割合で評価する A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満			
・生徒の思考力・判断力・表現力の向上	・門高読書タイムや図書館講座の実施	教務課	・読書活動を通して生徒の思考力・表現力・判断力の下支えとなる力を養成する必要がある。	【成果指標】（生徒） 「読書タイム」で読んだ本についての感想や考えをアウトプットすることができた。	「読書を通じて自分の感想や考えをアウトプットすることで、思考力や表現力が高まった」と答えた生徒の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満	A 89%	【分析】 自身の進路や生き方に関連する図書を選び、自己の在り方を見つめ直す生徒の様子が見られた。また、物語を通して他者の心情に深く共感する生徒もあり、自己有用感や豊かな社会性が高まっている。 【今後の対応】 読書での発見を「図書館の活性化」へ繋げるよう促す。知識を学校貢献という具体的な行動へ移し実感を伴った学びの循環を育ていく。	生徒対象調査(7,12月)
				① 高まった 56.8% ② 概ね高まった 32.6% ③ 余り高まらなかった 10.5% ④ 全く高まらなかった 0.0%	「自分の適性を十分に把握し、将来の進路について話すことができるようになった」と評価した生徒の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満			
・外部講師によるキャリア教育講演会 ・ふるさと事業 ・企業人インタビューDVDの活用 ・インターンシップ ・進路ガイダンス ・進路学習 ・出張オープンキャンパス ・上級学校見学会 ・地元企業見学会 ・アントレプレナーシップ事業	進路指導課 各学年	・働くことの意味や自分の適性を理解し、将来の進路設計を立てる力を早期より養成する必要がある。	① できるようになった 49.5% ② だいたいできるようになった 41.1% ③ ほとんどできない 8.4% ④ 全くできない 1.1%					
学校関係者評価委員会の評価	就職に関する進路講演会や1年次に上級学校見学を実施していることについて、進路意識を高めるいいきっかけになると思うので、これからも継続してほしい。							
評価結果を踏まえた今後の改善策	多様な進路行事を適切な時期に実施することによって、適性を見極め、視野を広げ、生徒一人ひとりに合った進路選択ができるように、今後も活動を検討していきたい。							

重点目標4 「危機管理マニュアル」の見直しを図り、教員・生徒が非常時に適切な行動ができる資質・能力を高め、減災につなげる。また、生徒が安心して学校生活を送れるよう安全管理を徹底する。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考													
<ul style="list-style-type: none"> 各種有事の際に、生徒・教員が安全を確保する術を身につけており、減災につながる行動ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 有事に即した危機管理マニュアルの見直し 大規模地震を想定し、減災につながる訓練の実施 特別支援学校との合同訓練 減災の観点による、施設の状況に応じた避難経路の更新 訓練後の振り返りの実施 生徒の危機管理意識の啓発 	総務課	<ul style="list-style-type: none"> 各種有事に対応できるよう、危機管理マニュアルの見直しが必要である。 新任の教職員が多く、有事の際の危機管理意識や対応力を高める必要がある。 	【成果指標】（教員） 有事の際、生徒・職員の安全を確保する術を身につけており、減災につながる行動ができる。	「有事の際、生徒・職員の安全を確保する術を身につけており、減災につながる行動ができる」と答えた教員の割合(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できる</td><td>56.3%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできる</td><td>43.8%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできない</td><td>0.0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできない</td><td>0.0%</td></tr> </table>	①	できる	56.3%	②	概ねできる	43.8%	③	余りできない	0.0%	④	全くできない	0.0%	A	【分析】 中間評価から「できる」と回答した教員が約30%上昇した。仮設校舎移転に伴う避難経路の確認や避難訓練等を通じ、防災・減災への意識が高まった。 【今後の対応】 先進校を視察して得た知見を校内にフィードバックし、より対応力を高め、確実な減災行動につなげていく。	教員対象調査(7, 12月)
				①	できる	56.3%															
②	概ねできる	43.8%																			
③	余りできない	0.0%																			
④	全くできない	0.0%																			
【成果指標】（生徒） 有事の際、安全を確保する術を身につけており、減災につながる行動ができる。	「有事の際、安全を確保する術を身につけており、減災につながる行動ができる」と答えた生徒の割合(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できる</td><td>73.7%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできる</td><td>24.2%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできない</td><td>2.1%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできない</td><td>0.0%</td></tr> </table>	①	できる	73.7%	②	概ねできる	24.2%	③	余りできない	2.1%	④	全くできない	0.0%	A	【分析】 多くの生徒が有事の際の安全確保に自信を持っているが、「概ねできる」や「あまりできない」との回答も一定数あり、実際の行動に不安を感じている生徒がいることがうかがえる。 【今後の対応】 次年度も実践的な避難訓練を行い、対応力を高める。また、先進校の生徒との交流を通して得た経験を全校生徒へ還元し、防災や減災の意識を高めていく。	生徒対象調査(7, 12月)				
①	できる	73.7%																			
②	概ねできる	24.2%																			
③	余りできない	2.1%																			
④	全くできない	0.0%																			
<ul style="list-style-type: none"> 各種有事を意識した定期的な安全点検 	<ul style="list-style-type: none"> 防災の観点による日常の安全点検の実施 定期的な安全点検の実施(毎学期) 有事後の安全点検の実施 	保健指導課	<ul style="list-style-type: none"> 普段の学校施設とは異なる場所で学習活動を行っていることから、あらゆること想定しながらきめ細やかな安全点検を実施し、生徒・職員の安全確保に努めていく必要がある。 	【成果指標】（教員） 安全管理への意識を高め、日常・定期・有事の安全点検を確実に実施することができる。	「日常・定期・有事の際の安全点検を、きめ細やかな視点を持って実施することができる」と答えた教員の割合(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できる</td><td>50.0%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできる</td><td>50.0%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできない</td><td>0.0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできない</td><td>0.0%</td></tr> </table>	①	できる	50.0%	②	概ねできる	50.0%	③	余りできない	0.0%	④	全くできない	0.0%	A	【分析】 中間の調査と比べると、「余りできない」がなくなり、「概ねできる」も減り、その分「できる」の方に回答が流れている。中間では金沢や加賀地区から赴任された方がいたので、その分震災の大きさをよく分かっていたためだと思われる。 【今後の対応】 「できる」がまだ半分であり、災害は年月が経つと忘れがちになるので、定期的に自然災害の備えや対策を考える機会を設けていく。	教員対象調査(7, 12月)
①	できる	50.0%																			
②	概ねできる	50.0%																			
③	余りできない	0.0%																			
④	全くできない	0.0%																			
学校関係者評価委員会の評価 災害はいつ起こるかわからないので、自分を守ることはもちろん、他人も守れるような人を育ててほしい。																					
評価結果を踏まえた今後の改善策 次年度も実践的な避難訓練を行い、対応力を高める。また、先進校の生徒との交流を通して得た経験を全校生徒へ還元し、防災や減災の意識を高めていく。																					

重点目標5 組織的・協働的に目標管理型校務運営による業務改善を進め、ワークライフバランスと教育活動の両立を実践する。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考													
<ul style="list-style-type: none"> 目標管理型の校務運営による、効率的・戦略的分掌業務の成果目標達成 	<ul style="list-style-type: none"> 左記の目標達成に向けて、到達度を数値で測り、仕事の質を向上させる 	各課 各学年	<ul style="list-style-type: none"> 目標達成度が曖昧なため、分析が緩く、対策が不明瞭である。 	【成果指標】（教員） 目標管理型の校務運営によって、数値目標達成に努めることで、個々の教科指導、分掌・学年業務の資質・能力を高めることができた。	「目標管理型の校務運営によって、数値目標達成に努めることで、個々の教科指導、分掌・学年業務の資質・能力を高めることができた」と答えた教員の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>6.3%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできた</td><td>81.3%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできていない</td><td>6.3%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできていない</td><td>6.3%</td></tr> </table>	①	できた	6.3%	②	概ねできた	81.3%	③	余りできていない	6.3%	④	全くできていない	6.3%	A	【分析】 調査が12月でまだ最終成果が見えにくいため、教員が十分に実感を得られていない状況である。それでも多くが「概ねできた」と回答しており、一定の効果は認められる。 【今後の対応】 年度末に向けて引き続き数値目標に沿った取組を進める。最終成果の可視化により、資質・能力向上の実感を高めていく。	教員対象調査(7, 12月)
				①	できた	6.3%															
②	概ねできた	81.3%																			
③	余りできていない	6.3%																			
④	全くできていない	6.3%																			
<ul style="list-style-type: none"> 最終退校時刻の遵守 定時退校日の個人設定(各月1日) 業務振り返りシートの作成 	全教員	<ul style="list-style-type: none"> ワークライフバランスの重要性を理解して、退校時間を意識した業務推進を更に徹底する必要がある。 	【成果指標】（教員） なぜ最終退校時間を遵守するのかを理解し、各分掌・学年・教科の優先順位をつけて計画的かつ効率的に校務を行っている。	「なぜ最終退校時間を遵守するのかを理解し、優先順位をつけて計画的かつ効率的に校務を行っている」と答えた教員の割合(①+②)が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>行っている</td><td>25.0%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ね行っている</td><td>56.3%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余り行っていない</td><td>18.8%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全く行っていない</td><td>0.0%</td></tr> </table>	①	行っている	25.0%	②	概ね行っている	56.3%	③	余り行っていない	18.8%	④	全く行っていない	0.0%	B	【分析】 中間評価時の56%から81%に数値が上昇した。残業時間調査の平均値についても、昨年度までと比べて数値は減少しており、効率的に業務に取り組もうとする意識が高まりつつあると考えられる。 【今後の対応】 「余り行っていない」の割合が18.8%であることから、次年度に向け、退校時間を守ることの意義や、効率的に業務を行うことの重要性をさらに醸成していく。	教員対象調査(7, 12月)	
①	行っている	25.0%																			
②	概ね行っている	56.3%																			
③	余り行っていない	18.8%																			
④	全く行っていない	0.0%																			
学校関係者評価委員会の評価 震災対応、仮設校舎への移転など多忙であると思うが、取組を継続させて、指導が更に充実するようにしてほしい。																					
評価結果を踏まえた今後の改善策 目標管理型の校務運営が定着し、教職員の意識にも変化が成果に表れていると考えている。次年度は、校務を組織的に行う体制を見直し、さらなる時間外勤務時間の減少を図る。																					